

右京三条一坊の調査

— 第384次・388次

1 第384次調査

個人住宅の新築にともなう調査で、調査期間は平成17年1月5日～14日、調査面積は東西7m、南北4mの28㎡である。

調査地は平城宮西南部の南方にあり、平城京三条一坊十六坪の西辺にあたる。現代の畑の耕土を除去した後、現地表面から約40cm下の青灰粘土上面で遺構を検出した。

青灰粘土の直上には川砂利を多く含む粗砂が堆積する。ほとんど遺物を含まないが、この中から染付片が出土した。青灰粘土上面には耕作によるとみられる大小の溝が縦横に走り、近世～近代までの床土と判断した。

その後、調査区中央の東西幅3mで粘土層を除去し、現地表面から約70cm下の明橙褐土上面で下層の遺構を検出した。粘土層は大きく2層に別れ、共に瓦片および瓦器片を含む。明橙褐土上面には幅に出入りがある南北溝SD2855があり、この埋土から弥生時代の土器片が多数出土し、明橙褐土上面から奈良時代以前の土器片が出土した。

明橙褐土の上面には細かい凹凸があり、粘土層に含まれる瓦片および瓦器片が強く摩滅していることから、古代～中世の河川（秋篠川）の氾濫によって粘土層が形成されたと考えられる。

最後に南半を断ち割り、明橙褐土が遺物を含まず、下層に遺構がないことを確認した。（金井 健）

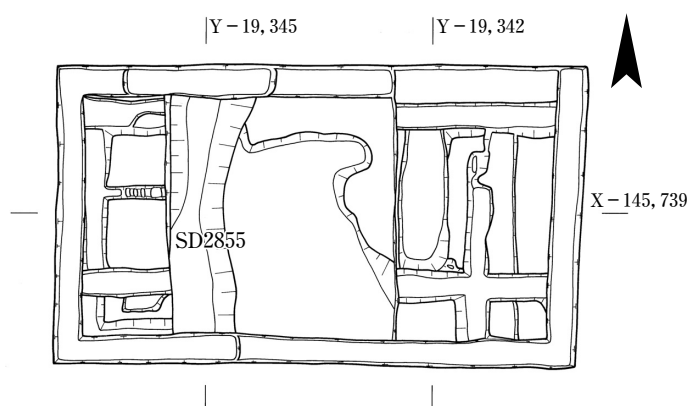


図158 第384次調査遺構平面図 1:100

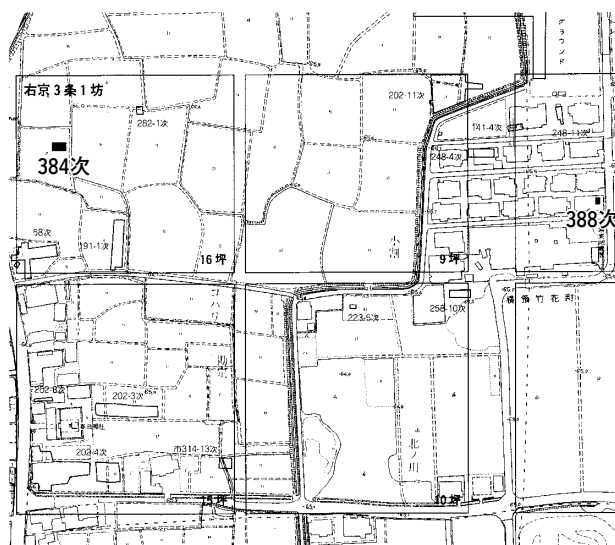


図157 第384次・388次調査位置図 1:4000

2 第388次調査

個人住宅改築にともなう調査で、期間は2005年3月14日から15日、調査面積は6㎡である（図159）。

基本層序は表土、アスファルトガラ層、黄灰色整地土（以上は住宅建設にともなう整地土）、茶灰褐色砂質土（遺物包含層）の順で堆積し、地表から約0.6mで遺構面に達する。遺構は黄灰色粘質土上面で検出した。以下、暗紫褐色砂質土の無遺物層、青灰色砂の地山となる。

土壙SK2880は検出部分で最大径2.5m以上、深さ0.25mほど残存する。辺縁部分にはわずかな段差があるが、底は平坦である。埋土中から弥生土器が出土した。

調査区東端には穴1基を確認したが、穴の辺縁部分だけを検出しただけにとどまり、規模は不明である。穴は砂の地山を掘り込んでおり、出水したために底を確認できなかった。

SK2880の土器は長頸壺の胴部1個体分と手焙り土器の肩部が出土している。時代はいずれも弥生時代後期末である。このほか、調査区全体から丸瓦4.1kg、平瓦3.3kg出土した。

（今井晃樹）

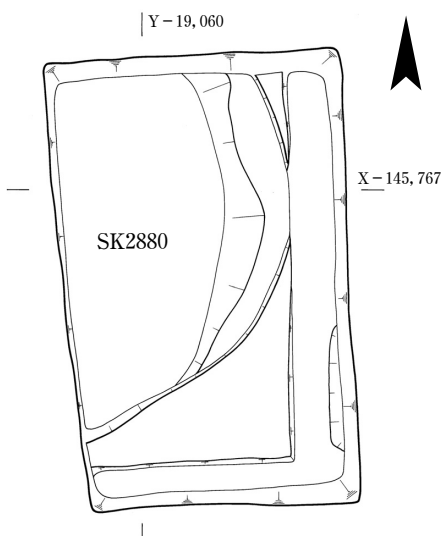


図159 第388次調査遺構平面図 1:50